特集 人材さがし・人材づくり 住民はあなたの助けを待っている

98年9月1日。

夕方6時45分。

木造1戸建てのK氏宅。

K氏帰宅。2人のこどもたちとK氏の70歳の母親はリビングでテレビを見ており、K氏の妻は夕飯の支度をしている。

ズ・ズ・ズ・ズッ……、

グーっと突き上げられるような、音と言うべきなのか不気味な感覚。

その瞬間、「地震だ！」K氏が叫ぶ。「お母さん、火を消して！」「こりゃぁ大きいぞ！」「危ない！本が落ちてきた！」「Aちゃん、Bちゃん、おばあちゃん、テーブルの下に入って！」「お母さんも早くッ！」「お父さんも早く入って！」「玄関のドアを開けてくる！」

この間約30秒。

まだ揺れが続いている。

（それぞれに阪神大震災の状況が脳裏を走る）。

「お父さん怖いよォ～！　お母さん～！」と子どもたちは泣きだし、両親にだきつく。

地震は治まった。

K氏は家族の無事を確認してホッと胸をなでおろした瞬間、隣家へ走った。K氏の母親と同年代の慢性疾患の一人暮らしの女性の安否を気遣って。

果たして彼女は、まだテーブルの下で震えていた。テレビは各地の地震状況を伝えており、東京は震度5と報道している。

もしこのとき地震が、K氏の家族が不安の真只中で予測したような阪神大震災並の地震だったとしたら……。

もちろんK氏は台所に立っていた妻や、そばにいた子どもたちに、火を消すことや、テーブルの下に潜り込むように指示するなどできなかったでしょう。その時の私たちにそんな時間は与えられません。自分自身を支えることさえもできないかもしれません。

その状況下での救援・救護体制

火災発生！

午後6時45分。この時間は多くの家の台所で火を使っているであろう時間です。その瞬間、身を守り、火を消すことなどはでき得ないかもしれません。

転倒家具の下敷き！

家族が集まっているリビング。

本が降り、家具は倒れ床を走り、飾り物たちや、コーヒーカップやガラスの食器たちが棚からバラバラと落ちて割れ、散乱します。

子どもたちの悲鳴！

「お父さん、お母さん、たすけてェッ！」

これは瞬時の出来事です！　なにが起きたのか、どれくらい時間が経ったのかも分かりません。

停電。真っ暗闇。

家屋、ブロック塀・電信柱等の倒壊による道路の閉鎖。

屋内だけではありません。路上は、家屋をはじめ、看板に至るまですべての物が散乱し、どこがどうなっているのか。夜に向かって、住民の不安は募ります。

このような時のために専門家と住民による救援・救護体制があると、建物の下敷きになった人たちと、または、怪我をしている人たちを、何時到着するかわからない消防署のレスキュー隊の到着を待つまでもなく助け出し、応急処置を施すことができるでしょう。

荒川区では災害時のために『市民レスキュー隊』が住民によって組織され、訓練を受けているそうです。

●災害時に役立つ人材の一覧表

必要と思われる活動	人材
建物等の倒壊からの救出	大工・工務店 土木工事（重機の活用） 解体工事（重機の活用） 印刷屋（フォークリフトの活用） タクシー会社（大型ジャッキの活用）
けが人の手当て	医師（各科） 看護婦 医療関係の学生 整骨院 薬局（医薬品の提供） 救急訓練受講者
初期消火	地元企業との連帯 地元学校との連帯
情報	留学生（外国人対応）
ボランティア	学生
災害弱者	ヘルパー登録者 主婦

「防災まちづくりの会」の救援・救護部会では、災害時における住民による、救援・救護体制を組みたいということになりました。

たとえば、建物の下敷きになった人を救出するために、フォークリフトや、ジャッキを使って、崩れ重なっているものを持ち上げたり、取り除いて、邪魔している梁などを切断しなければなりません。この救出活動の現場では、機械や道具として、フォークリフトや、ジャッキ・鋸など、それらを使いこなせる人材として建設関係や印刷屋さんの技術者や、職人さんが大事な役割を果たします。次に、救出された人たちは、お医者さんや、看護婦さんをはじめとする医療の専門家、それに準ずる人たちの活躍や、薬局を営む人たちからの薬剤等の提供で、急場の救命・救護活動ができるかもしれません。

そうした状況下で、人材や、機械や道具を一刻も早く集中するために、今、みなさんの知恵と技術そして、善意を束ねて、日常的な関わりも深めておこうというものです。

さらに、一般住民も救命訓練等を受講して、災害時には基本的な救護活動に参加できるように呼びかけようというものです。町会ごとに関係する専門の方々を名簿でリストアップして、ご協力をおねがいしたいと思っております。

災害時のどの場面でどのような人材・機械・道具・器材が必要なのかを、表にして左に示しました。

必ずしも災害時だけではありませんが、からだが不自由な方、慢性疾患の方、高齢者や子ども、女性や一人でお住まいの方などへの「声かけマップ」のようなものも、いろいろ課題がありますが、申告制などにして作成しておく必要があると思います。

たとえば、○丁目○番○号○○○マンションの○階の○号室に住んでいるYさんは、2日おきに人工透析をする必要があるとか、Sさん宅には、足が不自由で介護が必要な人がいらっしゃるとか、あえてもっと言えば、夜間あるいは昼間に、入り口からどの辺りにいることが多いとか、そういうことが日常的な関わりのなかで分かっていれば、災害時にも、一刻も早く応援に駆けつけたり、助け出すことができます。こうしたことを近隣の人達が把握することは個人のプライバシーに関することなので難しいと言われていますが、病気だったり、身体が不自由であったりすることを、当たり前に受け止め合うことをしてこなかったことによるものです。

このことは、今私たちがのりこえなければならないことです。

災害時という特殊な環境のなかでも、手を貸しあい、人が人として生き、心地よく過ごし、『逃げないで住む街』、安心して住み続けられる街づくりのために、みなさんご一緒に知恵と力を出しあいましょう！

防災まちづくりの会だより　第30回防災まちづくりの会全体会議（10月8日開催）

防災水利と人材づくり、ニュースの充実

池袋本町防災まちづくりの会は、全体会議と5つの部会（水利、道路、救援救護、防災センター・避難場所、広報）で構成されています。メンバーは町会推薦と公募からの計44名からなり、各メンバーはどこかの部会に所属し、必要に応じて開かれる部会の各テーマについて話し合っています。その結果は全体会に報告され、必要であれば決議をして会の意見として取りまとめられます。

防災まちづくりの会では、区と相談しながら、「いざという時、逃げないですむ安心なまちづくり」を目指して、様々なまちづくり事業を推進しています。今年度は、池袋中学校の井戸広場とその他に1ヵ所の防火貯水槽（5ｔ）を設置し、民間井戸の整備も行う予定になっています。

10月8日には、午後7時から池袋中学校図書室で第30回目の全体会議が開かれました。以下は全体会議で話し合われた概要です。

①まちづくり推進課からの報告

防火貯水槽については会から要望があった池袋本町二丁目の谷端川第二児童遊園に設置を検討していますが、この場所は道路が狭いために工事車両が入れるかどうか不明です。調査の結果、工事が可能であれば、整備を行います。

民間井戸の改修では、池袋本町一丁目の旧紀伊国湯（現在のソシエ池袋本町）の深井戸が残っており、それを使えないかという声がありました。所有者に伺ったところ、快くご承諾を頂くことができました。ところが旧紀伊国湯の深井戸は深さが150mあり、水を汲み上げるためのポンプや非常用バッテリー、飲料用とするための濾過器など、その整備にはたくさんの費用がかかることがわかりました。残念ながら今年度の予算ではそこまでの整備を行うことができません。そこで整備は来年度に回し、もう少し安くできる方法を検討中です。この報告を受けて、会では民間井戸の整備を、別に1ヵ所行いたいと考えています。場所は現在選定中です。

②救援救護部会からの報告

災害時に役立つと思われる人材（業種）について検討を行い、それぞれの人材について情報収集方法を検討しました（詳細については、別掲記事の「人材さがし」を参照してください）。

また、災害時に役立つ人材の組織化については、町会単位が望ましいという意見でほぼまとまりました。具体的な組織化の方法については、各町会の防災担当者と合同で検討会を開催することが決まりました。

③広報部会からの報告

まちづくりニュース11号の配布についての報告に続いて、まちづくりニュース12号の発行（本号）概要が発表になりました。11月1日発行で、タブロイド版（A3版4ページ）、地区内印刷屋に発注、10,000部。さらに配布方法については、全戸配布を原則として、各戸配布できない町会分は、広報部会員を中心にまちづくりの会メンバー有志で配布し、協力してくれた町会にはお茶代程度のお礼をすることが決まりました。

また、来年度の防災まちづくり祭は、アゼリア祭と同時開催になるかどうか不明なので同時開催でない場合は、より独自色のあるイベントをしたいという意見が出ています。たとえば神戸のキャラバン隊の話を伺う、防災ミニセミナーを同時開催する、震災のスライドを見る、などです。

④その他　江頭敏明氏より民有地への防火貯水槽の新設など合計10項目からなる「各部会に今後検討していただきたい事項」が提案されました。また、尾曽昭一氏より文成小が他の救護センターより避難所としての面積が不足していることが問題提起されました。

民間井戸の活用――手始めに台帳づくり

防災まちづくりの会では、災害時の水の確保のために民間井戸の活用を検討しています。そのための資料として井戸台帳を作成しています。

地区内にはまだ多くの井戸があり、その多くは現役で活躍しています。豊島区では井戸を災害時にも利用できるように防災井戸として登録をお願いしており、地区では26カ所が指定を受けています。まちづくりの会ではそれらの井戸を、災害時にも利用しやすくするために整備することを検討しています。整備とは、例えば道路から使えるように塀の一部を改修したり、道路側にポンプを移動したりすることです。写真は板橋区で行っている民間井戸の整備の例です。このように、所有者のご協力をいただきながら、災害にも役立つような井戸として整備できないかと考えています。

まちづくりの会では、どの程度、整備に適した井戸があるかを調査するために、防災井戸として登録されている井戸を中心に現地調査を行い、その結果を台帳としてまとめる作業をしています。

台帳には井戸の所有者の住所、氏名の他に、井戸が道路の近くにあるかどうか、飲料に適しているかどうかなどがまとめられています。この台帳をもとに、民間井戸の活用にご協力いただけそうな所にお願いし、ご同意をいただいたところから整備を進めていきたいと計画しています。

井戸の調査をして判ったことがあります。防災井戸に登録されているのはほんの一部で、まだ沢山の井戸が地区にはあるということです。まちづくりの会では、引き続き調査し井戸の台帳を充実させていきたいと考えています。防災井戸に登録されていない井戸をお持ちの方は、もよりの防災まちづくりの会会員までお知らせください。

◀板橋区で整備した井戸のある公園（昨年の見学会で）

町会訪問 ①　池袋本町二丁目町会・小島建之（ケンジ）町会長を訪ねて

防災訓練でも女性パワーが威力を発揮!!

現在、全596世帯をカバーする池袋本町二丁目町会は、かつては池袋四丁目町会に属しており、住居表示変更後、本町二丁目町会と中央町会、池袋四丁目西町会、池袋四丁目町会の四つに分かれてできました。

▲小島建之町会長

町会長の小島建之さんは、群馬県藤岡市生まれで、昭和24年に本町二丁目に移られ、息子さんご家族（孫3人）と一緒に住んでおられます。町会長に就任されたのは平成6年4月で、今年で5年目を迎えられました。

本町二丁目町会は、町会員を地区別に20班に分け、理事20名、役員30名を中心に活動を行っています。

地域防災にも力を入れ、2ヶ月に1回、防災訓練を行っており、さらに市民消火隊（10名）を組織しています。町会の防災部長は綿貫純一氏、副部長は古川英雄氏（当会委員）で、市民消火隊の隊長は、榊原清氏（当会副会長、水利部会長）です。

市民消火隊は、広域指定避難所である北区の桐が丘への避難路沿道（川越街道）の消火と火災類焼を防ぎ、避難誘導体制の強化を目的に設けられました。市民消火隊には、各町会が持っているD級ポンプより強力なC級ポンプが区から支給されています。

同町会が震災発生時に一時避難する救護センターは、池袋中学校ですが、同地区からは遠いため、近くの豊昭学園にも避難できるように町会としては、既にお願いしてあるそうです。豊昭学園のグランドは現在工事中ですが、来年7月には完成する見込みです。

防災訓練は、過去数年間は豊昭学園のグランドで行ってきましたが、昨年からはＪＲ東日本住宅の庭で行い、毎回、30名から35名ぐらい、多い時で50名ぐらいが参加しています。

防災訓練の内容は、町会のD級ポンプや三角バケツを使った消火訓練や、三角布や担架、人工呼吸などの救護・救護訓練など内容を分けて行っています。

「いざという時は、防災部長、副部長を中心に役員、理事が駆けつけて、互いに協力しながら災害を最小限に食い止める体制づくりを進めています。当町会では、特に婦人部の方々が熱心で、給食・給水など積極的に協力してくれています。ですから女性パワーの結集が町会のまとまりや相互の協力体制づくりに欠かせないものだと痛感しています。ハード面で町会として望むものは、D級ポンプで使える防火貯水槽をもっと増やしていただきたいということです。豊昭学園のプールや大型貯水槽にはD級ポンプの吸水口が届かなかったり、合わなかったりします。こうした取り付け口の改善を強く望みます」と小島町会長は要望を述べておられます。

最近、町会で話題となっているのは、ゴミの問題で、区が進める資源回収パイロットプランの導入にどう対応していくかがそうです。

氷川神社の祭礼も終わり、ひと段落したところですが、これから年末にかけて交通安全や歳末警戒など各町会とも多忙な日々が続くようです。そうした中、本町二丁目町会では10月18日にＪＲ東日本社宅庭で、救援・救護を中心とした防災訓練を行ったそうです。